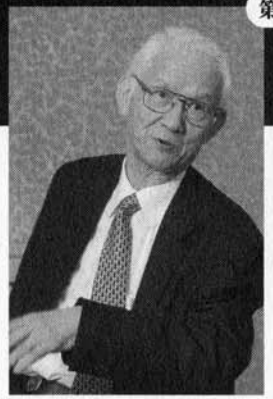

ドラッカー学会代表　上田惇生先生:1938年埼玉県生まれ。生前のドラッカーとも親交が厚く、『マネジメント』を始めとするドラッカー主要著作の全てを翻訳している。著書に『ドラッカー入門』『ドラッカー　時代を超える言葉』(ともにダイヤモンド社刊)がある。

「もしドラ」を読んで涙した上田先生。その理由は?

岩崎:上田先生が一番初めに「もしドラ」を読まれたのは、単行本のゲラの段階だったと思いますがその時の感想というのはどういうものでしたか?

上田:いや、読んだとたんにこれだと思ったよ!これは求めていたものだ!って。それで困っちゃったよね。もう涙こぼれてきちゃって。電車に乗ってたんだけど、帽子で涙隠して読んでたよ(笑)それで本になって読んでまた泣いて、3回目に読んでもっと泣いて。だんだん涙の量が増えていっちゃって。それで岩崎さんにそう言ったら、4回目はもっと増えますよって言われたんだ。なぜなら色々伏線があるからって。それがまたその通りで、読むたびにストーリーの中で新しい発見があるんだよね。

岩崎:ありがとうございます(笑)

上田:だから、純粋に楽しむ。質のいい涙が流れるっていうのは快感だからね。でもそうしながらですね、マネジメント、人と人とが働くということの真髄を理解できちゃうという、すごいことを経験できるんですよね。なぜかというと、仕事するということが、そもそもそういうことなんですよ。

岩崎:そうですね、本当に。

上田:いい仲間といい仕事をするとね、こんないい体験をした上に給料までもらうとは申し訳ない。そういう心境になるんですね。それが目指すべきことで、なおかつ会社を潰さないでちゃんとやっていくっていうのが経営者の責任。経営者っていうのは、いいものを世の中に提供するんだから、これは誇り高いものですよ。それでみんなが参加できる場を作るんだから、なお誇り高い。その代わり、めちゃくちゃ大変なのよ。責任を求められたりとかさ。だから働いている人の首を切らざるを得ないように会社をもってくるっていうのは、どんなことだろうが、やっちゃいけないことなんだよね。

金儲けのことだけを考えていては通帳の数字しか残らない

人から奪うことが事業の本質であるはずがない

上田:仕事と事業の本質を見誤ると、金儲けのことしか考えなくなる。というか、金儲け以外の喜びとか目的を知らないで仕事をすると、そうなっちゃう。で、ドラッカーはこう言うの。金儲け、金儲けって言ってる人たちは、たいてい成功するって。なぜなら金のことしか考えないんだからって、こう言うわけ。ひどい言い方する(笑)最近で言ったら、金儲けしようとやってる若手の人たちは、ある意味金持ちになるのは当たり前なの。金のことしか考えていないんですもん。でも、後で気がつくの。何もないじゃないかと。通帳の数字しか残らないわけ。自分はこれを作って世の中の人に喜ばれたってものを作る、それが主眼でないから。あるいは素晴らしいチームを作ってみんながにこにこと仕事をしたと。それが主眼でないといけない。

岩崎:ええ、やりがいとか、働きがいとかですね。

上田:そうそう。そういうものを与えたという喜びが関係ないわけだから。金のことだけ考えると。

岩崎:人から奪うことばかりになりますよね。

上田:そうそう!お客から奪って自分のポケットに入れる、さらには従業員からも奪って自分のポケットに入れるってことまでしちゃうわけだから。でも、そんなことじゃないんだ、事業っていうのはもっと素晴らしいんだってことが、「もしドラ」読むといつの間にかわかっちゃう。事業と経営の本質を、世界中のビジネススクールが教えてないことを、「もしドラ」は教えてくれるわけ。これを読んでれば一番質のいい経営学がわかる。いいものは誰だってわかるわけだから、人気出るのは当たり前だよ。むしろなぜ今まで時間がかかっちゃったのか、私としては不満。ドラッカーは言うでしょ?　不満を持たなきゃいけないって(笑)それで進歩があるんだって。だからね、ようやく間に合ってくれたよ、ああよかったという感じだね。